様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：特定領域研究
研究期間：2005～2009
課題番号：17063013
研究課題名（和文）　パレスチナにおける都市の発達と「セム」系民族の展開

研究課題名（英文）　Development of City-States and the Tribes in the Palestine Region

研究代表者
月本　昭男（TSUKIMOTO AKIO）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：10147928

研究成果の概要（和文）：現在のイスラエル国ガリラヤ地方にあるテル・レヘシュ遺跡にて、5 次にわたる考古学調査を行った。これによって、同地域における青銅器時代から鉄器時代にかけて見られる都市の発達とその文化的特性を明らかにすることができた。またアマルナ文書をはじめとする文献研究においては、上記テル・レヘシュが前 2 千年紀後半のエジプト碑文に言及されるアナハラトと同定されることが明らかになった。またこれまで発信地が不明であったアマルナ書簡 237～239 番がテル・レヘシュから発信された可能性が高いことを突き止めた。

研究成果の概要（英文）：Five seasons of archaeological excavations were carried out at Tel Rekhesh located in Lower Galilee, Israel.　As a result of the excavations, we clarified the development of a city in the region and its cultural characteristics. We also examined textual evidences of the second half of the second millennium BCE and came to the conclusion that Tel Rekhesh should be identified with Anaharat, a city state of the period mentioned in two Egyptian royal inscriptions. In addition to this, we came to know the possibility that the Amarna letters nos. 237-239, which provenance had been unknown, could have been sent from Tel Rekhesh.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	6,200,000	0	6,200,000
2006 年度	6,200,000	0	6,200,000
2007 年度	6,200,000	0	6,200,000
2008 年度	6,200,000	0	6,200,000
2009 年度	6,200,000	0	6,200,000
総　計	31,000,000	0	31,000,000

研究分野：　古代オリエント学、旧約学、宗教史学
科研費の分科・細目：－
キーワード：鉄器時代、後期青銅器時代、考古学、都市、アマルナ文書、アナハラト、古代イスラエル

１．研究開始当初の背景

パレスチナにおいては、前 2 千年紀前半（前 1800 年頃）にシリア地方からセム系民族の移住があったと言われてきた。本研究により明らかになるパレスチナ北部の都市社会の展開は、ビシュリ山系におけるセム系部族社会の動向と連動しているかどうかという点においての貴重な比較資料となる。また、後の

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に大きな影響を及ぼした古代イスラエル民族の起源についても、考古学的に検証できるものと思われる。

２．研究の目的

(1) イスラエルの下ガリラヤ地方に位置するテル・レヘシュ遺跡の考古学調査を行うことで、パレスチナ北部における都市社会の発達と展開を明らかにすること。

(2) 都市社会が展開する中で、セム族が果たした文化的役割を解明するために、旧約聖書の文献学的な研究ならびに考古・碑文資料（マリ文書、アマルナ文書等）の比較検討により、イスラエル民族の起源を探ること。

３．研究の方法

(1) イスラエル国にあるテル・レヘシュ遺跡の現地調査を行う。まず表面調査および試掘調査を行い、遺跡の居住史の大枠を把握することに努める。同時に、地表に露出した遺構の測量調査を行い、都市の構造を明らかにする。以上の調査から、都市の発達を示す文化層が存在すると思われる調査区を拡張し、下ガリラヤ地方に展開したセム系都市の物質文化の特徴および変遷を明らかにする。

(2) マリ楔形文書、アマルナ文書、西セム語碑文などに表れるセム系諸部族の動向研究（資料収集と分析）を行う。また立教大学にて研究会を実施し、新たに得られた知見に関して検討を行う。また上記の発掘調査成果を用いて、下ガリラヤ地方におけるイスラエル民族の出現について、検討を行う。

４．研究成果

(1)テル・レヘシュ遺跡（図 1）の考古学調査

①□前期青銅器時代

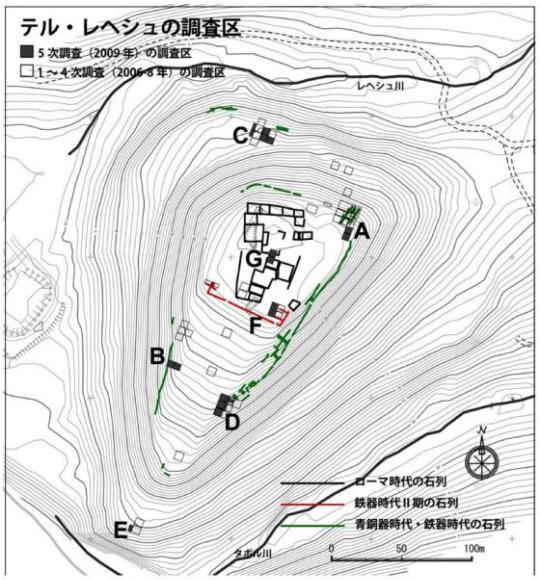

図 1 遺跡の地形図と調査区

前期青銅器時代については、表面採集した土器片中、この時代に年代づけられる破片の占める割合が少なくないだけでなく、A地区などからは実際に前期青銅器時代の土器片が数多く出土した。それは、テル・レヘシュの居住の開始時期が、パレスチナの都市化が開始される前期青銅器時代（前 3 千年紀前半）と重っていたことを示唆している。前期青銅器時代の遺構検出を想定して、第 3 次発掘調査時にC地区を設定した。だが、その最上部は鉄器時代の遺構が連なり、その下層には後期青銅器時代の遺構が検出されたものの、前期青銅器時代の遺構を検出するにはいたっていない。他方、東南の縁上部に設定したD地区の北端の最深部に施した試掘坑からは、前期青銅器時代 II 期およびⅢ期に属する、重なり合った複数の薄い石壁を検出することができた。試掘範囲が狭く限定的であったために、これら前期青銅器時代遺構の性格を特定するには至らなかった。試掘坑が岩盤まで到達していないこと、最下層から前期青銅器時代 I 期の土器が出土し始めていることなどを考慮すると、さらに古い時期の遺構が存在している可能性もあると考えられる。

②中期青銅器時代

前 2 千年紀の前半はカナンの都市国家が最も栄えた時代であり、考古学的には中期青銅器時代 II 期と呼ばれる。この時期の土器片は表面採集でも比較的多く確認されている。これまでの発掘調査では、遺跡の西斜面上部に設けたB地区で検出された、南北にはしる周壁の一部がこの時期に年代づけられる。その内側には青銅器時代の厚い石壁が、さらにその上部には鉄器時代の石壁が確認されており、中期青銅器時代に建造された城壁は、その後の時代まで、継続して使用されたのであろう（図 2）。いずれにせよ、中期青銅器時代 II 期のテル・レヘシュは厚い城壁で囲まれた中規模都市国家であったと思われる。

図 2 周壁とその内側の遺構

A地区はその地形から、北のテラス部分から遺跡の最上部の平坦部に入る城門の存在を想定して設けられた。2～4 次調査ここには想定通り、城門の一部が発見されている（図 3）。その城門が建造された時期に関しては、今後の精査をまたねばならないが、上に述べたB地区の周壁同様、中期青銅器時代に建造され、

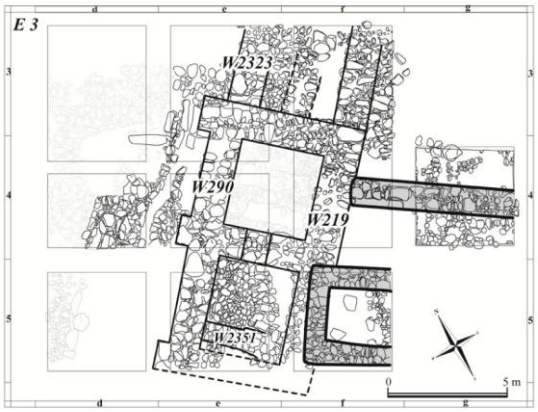

図 3 城門遺構の平面図

鉄器時代まで使用された可能性を考慮せねばならないであろう。東南の縁上部Ｄ地区からは、中期青銅器時代 IIＢ～IIＣ期に年代づけられる２基の甕棺墓が出土した。1 基は幼児の埋葬で、上部が壊された壺に、この時期に特徴的なテル・エル・ヤフディエ様式の小型水差し形土器とともに遺体が納められていた。もう１基は乳児の埋葬と思われ、頸部を切断した壺に納められ、やはり小型水差し形土器が副葬されていた。これらの人骨は分析の結果、前者が生後 18 カ月、後者が生後 1 カ月の幼児のものであることが判明した。2 基の甕棺墓は住居の土床面の下に納められていたものと思われるが、住居自体は確認できなかった。続く後期青銅器時代もしくは鉄器時代Ｉ期の建造物によって壊されてしまったのであろう。

③後期青銅器時代と鉄器時代Ｉ期

後期青銅器時代と鉄器時代 Ｉ 期の移行は前 1200 年前後と考えられ、かつては前者の破壊層をヨシュア記に描かれるイスラエルの民によるカナン都市の征服と結び付けられて解釈されていた。ところが、最近、少なくともガリラヤ地域においては、後期青銅器時代末から鉄器時代最初期にかけて、文化の断絶よりも連続性が指摘されている。テル・レヘシュにおける後期青銅器時代から鉄器時代への移行期を厳密に調査することは、この地域のイスラエル時代を理解するためにも、重要な課題となっていた。まず、テル下段のテラス北側に位置するＣ地区では、複数の部屋を有する鉄器時代Ｉ期の建造物が出土した（図 4）。さらに、その北側の下層からは後期青銅器時代の遺構が検出された。他方、鉄器時代Ｉ期とみられる建造物の一部には、複数の石柱が並ぶ部屋が発見されている。また、同一建造物の別の部屋からはカルト・スタンドと呼ばれる祭祀遺物が 3 点出土し(図 5)、生命の木（ナツメヤシ）をあしらった土器片、焼成粘土の仮面の一部なども出土した。つまり、この複合建造物は鉄器時代Ｉ期の宗教施設であった可能性が高い。後期青銅器時代から鉄器時代への連続性が確認されるのは、Ｄ地区である。ここからは、鉄器時代Ｉ期後半に破壊され焼失した長方形の建造物（13m×8m）が出土し、その中央からオリーブの搾油施設一基がほぼ完全な形で発見された(図 6)。

図 4 Ｃ地区の建築遺構

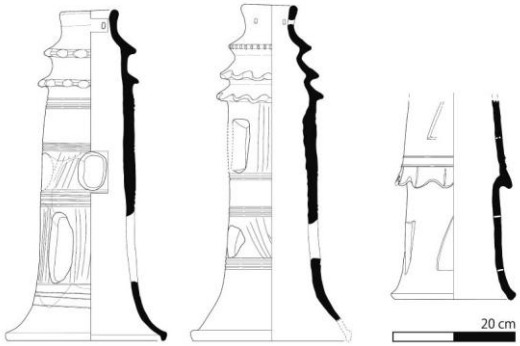

図 5 カルト・スタンド

図 6 出土した搾油施設

同一建造物の別の地点にも別のオリーブの搾油施設が確認されている。また、その西側の部屋の床面からは後期青銅器時代後半の土器が出土しており、この地区の建造物自体は後期青銅器時代に建造され、鉄器時代Ｉ期に改装されて使用されたものとみられる。遺跡の南端部分でも、２基の搾油施設と目される遺構が発見されているが、それに伴う土器からみて、こちらの遺構は鉄器時代Ｉ期に年代づけられよう。いずれにしても、ここには、後期青銅器時代から鉄器時代Ｉ期にいたる文

化の断絶はみられない。
④鉄器時代 II 期とローマ時代
テル頂上の平坦部は、鉄器時代 II 期には方形の周壁が築かれ、要塞として利用されていたと考えられる。それはすでに地形からも想定されたことであったが、F 地区の発掘調査でより鮮明になった。そこから遺跡を東西に直線的にはしる強固な二重の要塞壁（幅 1.5m と 1.1m）が発見されたからである（図 7）。出土土器から判断すると、この建造物の年代が鉄器時代 II 期後半に属することは間違いないが、より厳密に、それが北イスラエル王国時代か、それとも王国滅亡後のアッシリア属州時代か、という点は検討の余地を残すと同時に、その結論はイスラエル史の上でも重要な意味をもってくるだろう。テルの最頂部にはローマ時代とみられる複合建造物の崩れた石組み遺構が露出している。この遺構のおおよその輪郭については、宇野隆夫氏の協力で図面化しえたと同時に、その一部で試掘を行った。その結果、この遺構がローマ時代初期に典型的な「ファーム・ハウス」と呼ばれる建造物に類似していることも判明した。また、発掘調査ではオリントス式の石臼や磨石が出土しており、さらにはユダヤ教の祭司層が穢れを避けるために使用したといわれる、石灰石製の容器の破片も発見されている。こうした痕跡はヘレニズム時代には居住のなかったテル・レヘシュに、ローマ時代になってから、農業に従事する小規模な集団が入植したことを示唆しているだろう。それがユダヤ人の共同体であったのかどうかを考古学的に確認する課題は今後に残されている。

(2)アマルナ文書・マリ文書の再検討
アマルナ文書にみるセム系民族のパレスチナにおける動向については、パレスチナ発信書簡を検討した結果、これまで発信地が定かではなかったアマルナ書簡 237～239 番が上に述べたテル・レヘシュと同定される可能性が明らかになった。また、アマルナ時代のハビル人の動向に関する再検討も研究代表者を中心に実施し、これまでハビル人と同定されてきたサ・ガズとハビルとは区別されなければならないことが明らかになりつつある。この辺の消息は、月本昭男「考古学はイスラエルの起源を明らかにしうるか」(2007 年)においてその成果の一端を公表した。
なお、当初計画していたマリ文書におけるセム系牧羊民族の再検討は、特定領域の別の研究班（「『シュメール文字文明』の成立と展開」、研究代表者前川和也）において実施されたこともあり、本研究班では本格的な取り組みは行わなかった。
(3)「セム系」民族めぐる問題点
従来、中期青銅器時代および後期青銅器時代の物質文化の成立は、前者がアモリ人による、後者がアラム人によるセム系民族移動の結果であると説明され、鉄器時代 I 期はイスラエル人による定住期と重ねられた。しかしながら、テル・レヘシュ遺跡の考古学調査によって、中期青銅器時代 II 期から後期青銅器時代にかけての都市構造自体の継続性、また後期青銅器時代 II 期から鉄器時代 I 期にかけての物質文化の連続性が浮き彫りとなった。したがって、セム系民族の大規模な移動と関連づける見解は、再検討されるべきであろう。セム系のイスラエル民族は、旧約聖書によれば、十二の部族から成り、テル・レヘシュ遺跡の所在する下ガリラヤ地方はそのうちイッサカル部族に割り当てられていた。テル・レヘシュの発掘調査結果は、後にイッサカル部族と呼ばれる同地域のセム系住民が鉄器時代 I 期に外部から流入し、後期青銅器時代に住んでいたカナン人を征服した人々であった、という従来の定説に大きな疑問を投げかけずにはおかない。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 35 件）

① 月本昭男、イスラエル、テル・レヘシュ遺跡発掘調査報告、キリスト教学研究、査読有、51 巻、2010、pp. 221－231
② 山我哲雄、歴代誌におけるヨシャファト王とその対外政策、聖書学論集、査読有、40 巻、2008、pp. 1-44
③ Paz Y. and H. Kuwabara, The First Season of Excavation at Tel Rekhesh: the preliminary stage(15-27th March 2006)、Orient Express、査読有、2007/1-2、2008、pp. 17-25
④ 月本昭男、古代メソポタミアにおける死生観と死者儀礼、西アジア考古学、査読有、第 8 号、2007、pp. 1-10
⑤ 牧野久実、鉄器時代のエン・ゲヴのケースメート式城壁（二重城壁）に関する一考察～その機能に関する置田雅昭氏の仮説をめぐって～、西アジア考古学、査読有、第 8 号、2007、pp. 131-141

〔学会発表〕（計 12 件）

① 小野塚拓造・月本昭男・桑原久男、イスラエル、テル・レヘシュ遺跡 2009 年（第 5 次）発掘調査、西アジア発掘調査報告会、日本西アジア考古学会、2010 年 3 月 28 日、サンシャイン文化会館
② Y. Paz、Tel Rekhesh Excavation Project: The First and Second Seasons(2006-7) of Excavations at Tel Rekhesh、Japanese Expedition、6th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East、2008 年 5 月 5-10 日、 Sapienza University（ローマ）
③ 牧野久実、ハル・ヤルハム再考、イスラ

エル考古学定例研究会、2008 年 6 月 28 日、鎌倉女子大学
④ 月本昭男、考古学から見た古代イスラエルの“起源”、日本西アジア考古学会公開講演会、2007 年 6 月 9 日、天理大学

〔図書〕（計 10 件）
① 月本昭男、岩波書店、古代メソポタミアの神話と儀礼、2010
② 月本昭男、聖公会出版、古典としての旧約聖書、2008
③ 牧野久実、ミルトス、イスラエル考古学の魅力、2007

６．研究組織
(1)研究代表者
月本　昭男（TSUKIMOTO AKIO）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：10147928
(2)研究分担者
置田　雅昭（OKITA MASAAKI）
天理大学・文学部・教授
研究者番号：50248176
（H17→H19）
山我　哲雄（YAMAGA TETSUO）
北星学園大学・経済学部・教授
研究者番号：80230332
市川　裕（ICHIKAWA HIROSHI）
東京大学大学院・人文社会系研究科・教授
研究者番号：20223084
（H17→H19）
杉本　智俊（SUGIMOTO TOMOTOSHI）
慶應大学・文学部・教授
研究者番号：80338243
（H17→H19）
牧野　久実（MAKINO KUMI）
鎌倉女子大学・教育学部・准教授
研究者番号：90212208
桑原　久男（KUWABARA HISAO）
天理大学・文学部・教授
研究者番号：00234633
（H17→H19）
(3)連携研究者
置田　雅昭（OKITA MASAAKI）
天理大学・文学部・教授
研究者番号：50248176
（H20→H21）
市川　裕（ICHIKAWA HIROSHI）
東京大学大学院・人文社会系研究科・教授
研究者番号：20223084
（H20→H21）
桑原　久男（KUWABARA HISAO）
天理大学・文学部・教授
研究者番号：00234633
（H20→H21）